

令和6年度下松市総合教育会議議事録

- 1 開催日時 令和6年11月8日（金）午後1時30分～午後2時50分
- 2 開催場所 下松市役所5階 503会議室
- 3 出席者 〔構成員〕

市長	國井益雄
教育長	玉川良雄
教育委員会委員	江口雄二
教育委員会委員	林 哲人
教育委員会委員	木佐谷真理子

〔関係者〕

企画財政部長	中山 昇
総務部長	広中和博
地域振興部長	真鍋俊幸
教育部長	原田幸雄
教育次長	引頭康行
学校教育課長	藤田康伸
学校給食課長	小林政幸
生涯学習振興課長	戸高孝文
図書館長	網本浩明
下松中央公民館長	桑島洋明
学校教育課主幹	田谷義和
学校教育課指導員	長谷川敬
教育総務課管理係長	金子麻紀

4 会議の付議の顛末

○**教育総務課長** 改めまして、皆さん、こんにちは。本日の進行を務めます教育委員会教育総務課長、引頭と申します。よろしく願いいたします。

それでは、次第に沿って進めてまいります。

開会に当たりまして、國井市長よりご挨拶をお願いいたします。

○**市長** 皆さん、こんにちは。國井でございます。令和6年度下松市総合教育会議の開催に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

教育委員会の委員の皆様には、ご多用の中をこのようにお集まりをいただきまして誠にありがとうございます。今年、下松市にとりまして市制施行85周年という記念すべき節目

の年でございます。諸先輩方が築いてこられました大きな礎に感謝をしながら、新たなまちづくりの第一歩を踏み出してまいりたいと考えているところでございます。

さて、この総合教育会議は、市長部局と教育委員会が十分な意思疎通を図り、教育についての課題やあるべき姿を共有する、そういう場でございます。本日は、地域連携教育をテーマに意見交換を図りたいと考えております。子供たちは地域の未来、そして、地域の宝であります。私は、「子どもを大事にするまち下松」、これを表明しているところでございます。子供たちが下松に誇りを持ち、愛着を育むとともに、たくましく未来を切り拓くことができるような、そういった教育の在り方について、皆様方のご意見をお聞かせいただきたいというふうに考えております。本日の会議を契機に、目指す方向性を共有し、今後の取組がますます進展することを期待しております。本日は、皆様方の忌憚のないご意見を賜り、実り多い会議にしたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いを申し上げます。

簡単ではございますが、開会に当たってのご挨拶といたします。本日はよろしくお願いいたします。

○教育総務課長 ありがとうございます。

本日の日程についてご説明いたします。

初めに、藤田学校教育課長から地域連携教育についてのご説明をいたします。その後、市長と教育委員会との意見交換、協議を行うこととなります。

それでは、藤田課長、よろしくお願いいたします。

○学校教育課長 学校教育課の藤田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

お手元のほうにプレゼンテーションの資料、それから、1部、下松中学校区の地域連携カリキュラムというものを用意しておりますので、それも随時御覧ください。地域連携カリキュラムにつきましては、今、学校が地域と連携教育を行っていく上での設計図というようなものになりますので、またごゆっくり御覧ください。

それでは、下松市の地域連携教育の取組についてご説明してまいりたいと思います。座って失礼します。

本日は、大きく3点についてご説明いたします。

まずは、地域連携教育にとって非常に重要であるコミュニティ・スクールとその導入の経緯について、次に、本市の地域連携教育の主な取組、そして最後に、子供たちの地域づくりの取組や意識などを紹介してまいります。

では、初めに、コミュニティ・スクールについてご説明いたしますが、コミュニティ・スクールにつきましては、コムスクとか、CSとかいうふうに訳すことがありますので、このたびはCSというふうに訳させていただきますので、よろしくお願いします。

早速ですが、CSとは何かということですが、端的に言いますと、学校運営協議会を設置した学校のことを指します。学校運営協議会とは、地域住民や保護者の代表などで構成されております。一定の権限と責任を持って、学校の運営であるとか、支援についてメンバーで協議をします。校長が示す学校運営の基本方針、こういったものを一緒に協議しながら承認

すること、それから、学校運営全般について意見を述べること、教職員の任用について意見を述べることなどの大きく3つの役割があって、これは法規で定められております。

続いて、CSの導入についてですが、中教審の答申を経まして、平成16年に法で規定がされました。山口県は、早速平成26年から全国に先駆けて、そういった山口型地域連携教育を推進していくというのを打ち出しまして、平成28年には県内全ての小・中学校がCSを導入しております。下松市もこのときに一緒に導入しております。平成29年には、また法改正があり、これが今、努力義務化というふうになり、山口県としては、令和2年には、県立学校も含めて県内全ての公立学校がCSとなっております。

コミュニティ・スクールが求められてきた背景でございますが、近年の社会構造の変化、それを3点ばかり挙げてございます。それから、学校運営に関わる様々な変化等がございます。特に学校においては、予測困難な時代の到来を見据えて、学校だけでは得られない知識であるとか経験、能力の育成、また、諸問題、不登校であるとかSNS上の問題、あるいは教員の働き方改革など、様々な課題の解決のために、改めてCSの意義であるとか必要性などが問われているところであります。

全国の導入状況です。ここ数年は導入率が増加しております。令和5年5月には50%を超える状況です。こうしたCSの導入による成果としては、「学校と地域が情報を共有するようになった」とあるとか、「地域が学校に協力するようになった」、より協力が進んだという意味だと思っておりますが、それから、「特色ある学校づくりが進んだ」など、肯定的な回答が8割を超えていて、非常に多かったということを見ております。

山口県では、そうしたコミュニティ・スクール、いわゆるCSと家庭や地域住民等との連携・協働により、郷土への誇りや愛着を育み、子どもの豊かな学びや育ちを実現する教育、これを地域連携教育として、社会総がかりによる取組を推進していくこととしております。

それでは、本市における地域連携教育の取組の概要についてご説明いたしたいと思えます。

全国的に人口の減少が進む中で、本市では微増傾向もございましたが、令和4年度あたりからは減少に転じているということで、他地域と同様に、コミュニティの希薄化であるとか、地域の担い手不足といった課題は同様であります。

そのような中、改めて家庭、地域、学校が連携・協働する仕組みづくりが大切です。本市では、ご説明してきましたCSの仕組みを生かしながら、地域とともにある学校づくり、学校を核とした地域づくりを進め、「ふるさとに誇りをもち、たくましく未来を切り拓く、心豊かな下松っ子」の育成を目指してまいりました。

平成28年に市内小・中学校に全てCSが導入されたという話をいたしました。導入期には、まず組織づくりであるとか、本市独自の取組であるCSコーディネーターの導入などがありました。それから、定着期としておりますが、そこでは、地域の方による教育活動の支援を中心とした取組が進んでおります。

しかしながら、令和元年末あたりからコロナ禍ということで、地域と連携した取組が十分

にできない状況もありました。ですが、その中でも各学校でできることを着実に進め、子供たちによる学校づくり、地域づくりに向けた取組が進みました。こうした緊急事態といいましか、不測の事態こそCSの強さが生きてくるというふうにも言われ、地域とのつながりというのがより叫ばれたところでもあります。

それから、令和4年ですが、これまでの取組の成果と課題を整理し、ここで推進テーマを設定いたしました。『くだまつ愛』で子どもと大人が学びでつながり、子どもが地域のよさを実感する下松市の地域連携教育。地域住民や様々な団体、市長部局や高等学校などと連携しながら取組を進めるという形ができてまいりました。

取組の一端をご紹介します。

中学校では令和2年、小学校では令和3年から、児童生徒が学校運営協議会へ参加するようになりました。それまでは大人と、地域の方と学校の教員等が主なメンバーだったのですが、取組のやはり中心となるといいですか、当事者となる子供も参加して一緒に企画を考えたり、取組を充実させていくということを行ってきております。翌年になりますけれども、全ての小・中学校でこうした児童生徒が学校運営協議会に参加し、自分の思いなどを伝える取組が始まっております。

それから、学びの当事者の話をいたしました。そうした子供が参加することで、社会に開かれた教育課程の実現がより進んでいっていることと、先ほどお手元にありますと言いました学校地域連携カリキュラム、こういったものの作成・見直しがどんどん進んでおります。このカリキュラムについては、各学校で年度始め等々にもつくられますけれども、途中でどんどん見直しがされる、途中でいろんなことが書き加えられる、子供たちの意見も聞きながら変更される生きたカリキュラムとして、紙キュラムにならないようにしていくというのが各学校の思いであります。

一つ飛んでしまいました。これが、子供たちが一緒になって考えたカリキュラムで、表の中に取組等を落とし入れていくところでございます。

本市では、これまでも「くだまつてくてくウォーク」など中学生と高校生が連携した取組、これが進んでおりましたが、昨年は小学生・中学生・高校生が一緒に熟議を行い、合同で市内一斉清掃を行うという取組も行われてまいりました。これですね。今、右側は、中高合同の一斉清掃の様子で、今年はこれに小学生が入って行くということです。左側は、久保中学校、下松高等学校の生徒が話し合いをしているということなのですが、ちょっとすいません、写真が小学生入っていないんですけども、小学生も加わりながら、そうした広がりが増えてきていることにご理解をいただけたらと思います。

それから、CSの役割の一つに学校課題の解決があると申しましたが、家庭教育支援チーム、これが主催をして、保護者が不登校に関することや子育ての悩みを気軽に話し合える場となる「ひだまり親カフェ」であるとか、「share☆light」などの活動も続いております。

このように、本市の地域連携教育の充実を支えてきたのは、コロナ前、また、コロナ禍の

中でも、地域の方々による様々な教育活動、こういった継続的な支援によるものであることは言うまでもありません。

では、先ほどからたくさん登場していますが、地域づくりに参加する子供についての子供の意識であるとか、取組について紹介してまいりたいと思います。

まず、子供の意識でございますが、このグラフは、市の総合計画作成のため、令和元年に市内中学2年生、高校2年生にアンケートした結果です。「市への誇りや愛着を感じるか」という質問には、「とても・まあまあ感じる」と答えた生徒は6割程度でございます。一方、「卒業後も下松市に住みたい、市外に出ても戻ってきたい」と答えた生徒は約3割でした。

これは、同じ年の令和元年なのですが、市制施行80周年記念行事の一環として、市内小学生の児童が「10年後の下松を夢見て」と題しプレゼンテーションを行ったときのものです。このときの様子、子供たちの意見の中には、「下松を下松（しもまつ）に間違えられるので、もっと下松をPRしたい」という思いや、「市のシンボルの星の塔がある旗岡山にモノレールを走らせては」といった小学生ならではの思いや、夢いっぱいのアイデアが出されたというふうに聞いております。

令和3年ですが、子供たちがまちづくりへの興味関心、こういったものの関心を高めるきっかけとなるよう、下松市総合計画の子ども版が作成されております。小学6年生はこの子ども版を活用して下松の未来のまちづくりについて考え、自分たちができることを学習しております。

それから、令和4年になりますが、これはコロナ禍の最中でありますけれども、マスクを子供がしていたり、大人も間隔を空けて座ったりするときだったのですけれども、公集小学校の6年生が、未来のまちづくりについて考えたことを國井市長や地域、保護者に発表しました。「新しい大学を造ってみては」とか、「笠戸大橋をイルミネーションで飾るといい」など、ここでも夢のある意見がたくさん発表をされました。

そして、今年の夏なのですが、下松中では、学校で開催していた夏祭り、これを地域と連携して行いたいという生徒の願いもあって、駅前の土曜夜市やとよいまつりに生徒が出向いて、ブースを設けたり、生徒が作った竹灯籠を飾ったりして祭りを盛り上げました。左は、祭りの実行委員会で企画を説明している生徒の様子です。地域の方や子供たちにプレゼンをしている姿であります。

また、9月の末には、今度は、下松小学校の6年生が、未来の下松について國井市長を囲みでの意見交換を行うタウン・ミーティングが行われました。タウン・ミーティングの中では、子供たちからたくさんの意見が出されております。前、少し出たものと重複するところがありますけれども、「下松をもっとPRできるといいな」、それから、「下松駅をきれいにするといいのではないか」とか、そういったたくさんの意見が交換されております。

それから、毎年4月に全国学力・学習状況調査が行われておりますが、その中の質問紙に、「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることはありますか」と子供たちの意識を問う質問が3年続けてございました。御覧のように、令和3年度はコロナの影響もあり、

やや数値が下がっておりますが、4年度には、肯定的な回答をした子供の割合が再び増えております。さらに、5年度以降につきましては、多少質問が変わったのですけれども、数値がまた大幅に伸びているところであります。

また、令和4年度になりますが、自治会連合会が小学6年生を対象に実施した地域づくりに関するアンケートがございました。今の地域に住んでいてよかったと思う理由について聞いたところ、一番上から、一番多かったところから言いますが、「近所の人・まちの人が優しい」「山や川などの自然が多い」「店がたくさんある」などが順に挙げられております。そして、右側のグラフになります。「今、住んでいる地域に大人になっても住み続けたいと思いますか」と聞いたときに、答えた児童は65%でありました。先ほどお示ししました元年度の中高生のアンケートでは、「住み続けたい・戻ってきたい」と答えた生徒が約3割ぐらいでした。アンケートの対象や時期が違うこともあり、一概に比較はできないんですけれども、中学生に比べて小学生のほうが、より大人になっても住み続けたいという子供の割合が多く、年齢が上がるに従って少なくなっているのではないかというふうに思われます。

では、終わりに、市の地域連携教育の現在地と今後の課題についてお話をします。

C Sの成果につきましては、御覧いただきましたように、C Sの仕組みが機能してきたことと同時に、子供たちが地域のことを学び、地域で一生懸命頑張っている方と出会い、豊かにつながる中で、地域への誇りと愛着が生まれ、地域づくりに対する意識が高まっているのではないかと考えております。

また、今後の課題といたしましては、地域人材の固定化や高齢化が進む中で、持続可能な取組の継続、これが課題であり、そのためにも保護者や若い世代をしっかりと巻き込んでいくことも大切ではないかというふうに考えております。

ふるさとくだまつを愛する子供を育てるということで、以上で学校教育課の説明を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

地域連携教育

～「ふるさとくだまつ」を愛する子どもを育てるために～

○**教育総務課長** それでは、議事に入ります。議事の進行につきましては、下松市総合教育会議運営要綱第4条第3項の規定により、國井市長が行うこととされておりますので、よろしく願いいたします。

○**市長** それでは、私のほうで進行をさせていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

ただいま藤田学校教育課長から、下松市が受ける地域連携教育の取組について説明ございました。これは学校側を中心にした、学校サイドからの、今、報告だったように思います。

地域と学校が共に取り組むという活動、委員の皆さん方には外からというか、地域から眺めているいろいろなご意見をいただけたらと思うのですが、今、藤田課長からの説明を受けて、地域と連携した教育についてお感じになられたことなどご意見をいただければと思うのですが。教育長。

○教育長 先ほど課長のほうから、これまでの地域連携について端的に、コンパクトに分かりやすくまとめていただきました。ありがとうございます。今、市長さんのほうからありました地域連携について、学校外の立場から見た、何というか、認識とか感想等を述べたいと思います。今のプレゼンについても感想を述べさせてもらいます。

地域に開かれた学校教育が平成28年度から展開され、その教育活動の充実ぶりが今の発表から見て取れました。学校はまさに地域に支えられて、地域とともに学校教育が行われているということを、改めて実感したところであります。地域の教育資源というものを各学校とも本当によく活用して、地域人材と連携をしながら、子供たちが主役となるような教育を進めてきているということも感じました。また、地域の大人も子供たちへの支援だけでなく、大人が自ら楽しみながら、学びながら、喜び、そして、生きがいにつながっていくというふうに思います。地域連携教育は、新たな地域での人のつながりを生み出しているというふうにも思いますし、子供も大人も双方が生き生きと学ぶ教育活動を生み出しているのではないかなというふうに感じました。まさに地域連携教育は人づくりであり、まちづくり、そして、地域の担い手づくりではないかなというふうに感じたところであります。

課題といいますか、留意しなければならないのは、この地域連携教育が活動あって学びなし、活動はあるけれども、そこに子供たちに本当の学びとなっているのかということには十分配慮しなければならないのではないかなというふうに思っております。そのために、今、学校で行われているのが、それぞれの学校で地域連携カリキュラムというものを作成し、計画的に実践しております。活動そのものに学びの意味を持たせているわけです。計画、目標、そして、それを実践し評価していくと。こういうPDCAのサイクルの中で、教育成果を価値づけていくということが大事なかなというふうに思っております。

それから、地域の方への感謝といいますか、本当に地域の方にいろいろやっていただき、本当に感謝の気持ちでいっぱいあります。子供たちもそうした地域の大人の姿に学ぶところが多いのではないかなというふうに思います。子供たちにお世話をする、いろいろ教える、共に活動をする、そうした関わりの中で、子供たちはいろいろなことを感化されているのではないかなというふうに思っています。これは非常に大きいと、地域連携教育の大きなメリットの一つではないかなというふうに思っています。

それから、人と触れ合うということが、この活動の中では多くなっているわけですが、その中で地域のよさ、人の温かさというものも子供たちは学び取ることができるのではないかなというふうに思います。また、そのことが感謝の気持ちや憧れというものを生み、地域愛の醸成につながっていくというふうにも思います。子供たちも地域の一員としての自覚というものが高まってきているというふうに考えております。子供たちはもともと地

域をもっとよくしたいとか、何ができるのかというようなことは常に考えております。私もこれについては、学校で子供たちといろいろ話すときに、よく感じているところであります。子供たちは、ただ、地域のことをあまりよく知っていないというところがありますので、もっともっといろいろな経験をさせてあげたり、いろいろなことを教えてあげたり、そういう機会を増やしていくということが大事なのかなというふうに思っています。一昔前は、学校は地域の人にとって非常に敷居の高い存在であったというふうによく言われておりましたが、今は、地域の方は、何というか、学校に取りあえず行って、子供たちの活動を見て、笑顔を見て、そこからやれるところを見つけて、何か子供たちと楽しみながら活動してみようかというような雰囲気も出てきております。非常に敷居が低くなってきたのではないかなというふうに感じております。子供たちも進んで地域行事に参加したり、祭りに参加したりするようになっておりますし、先ほどもありましたが、企画運営に関わって主体的に地域行事を動かしていると。まさに地域の一員としての役割を果たしていったのではないかなというふうに思っております。いろいろありますが、この地域連携教育の成果というものを改めていろいろ学ぶことができました。ありがとうございました。

○市長　ありがとうございました。ほかにございませんか。林委員。

○委員　本格的にこの地域連携が始まったのが平成26年というふうに書いてありますけれど、ちょうど私、実は、学校現場から上がってきたのですが、平成24年にもう退職しましたので、それ以前の学校の様子はどうかというと、こういう地域連携について、学校運営協議会というのはもちろん設けていたわけなのですが、実際に地域の代表の方と私が年度始めと年度末に、年度初めに目標を掲げ、年度末に、成果を聞いてもらおうと。ただし、それは運営協議会の数人の方だけで、それで一応連携ができていたというふうに思っていたのですが、その後、もう十数年たちますけれど、かなりの勢いで連携が進んでおりますし、それによって大きな成果が、今、どんどん上がってきているのではないかなと思っています。最初は、地域人材を活用するということで、地域の方に学校に来てもらって、何かの授業のときにちょっとお手伝いしてもらうゲストティーチャーというような形でやっていた程度だったのですが、今は子供たちが積極的に地域に出て、それも最初の頃は、ボランティアにするにしても、お客さんとしてお手伝いをするという形でいたのですが、今はそれがお手伝いではなくて、子供たちが主役になって、一緒に公民館まつりなどを運営し、会議のほうからもうスタートしている。そういう意味で、それこそ10年たったらこんなに変わっていったという、そんな雰囲気をさっきの発表を聞きながら思っていました。

以上です。

○市長　ありがとうございました。続いて、江口委員どうぞ。

○委員　地域連携教育って大変難しいと思うのですが、私はいろいろと経験してきて思ったのは、やはり子供たちが考えている、下松は大変いいところだということをどんどん教えたいと思うのですね。それを誰が教えるかというと、やっぱり地域の人とか、学校の先生とか、あるいは市長さんとか、いろいろな媒体があると思いますが、自分で経験してみても下松が一

番いいということを、まず実感させるということが大事なので、僕が思うには、学校にいる授業よりも、授業時間中に社会に出て、例えば、いろいろな人とお話をするとか、あるいは掃除をするとか、スーパーのお手伝いをするとか、やっぱり実践的なもので社会の仕組みをどんどん学んでいき、それが教育ではないかと、まず思います。それは学校の教育が一番大事なのですが、それをもうちょっと増やしてもいいのではないかと。それから、さらに子供たちは、やはり自分たちの住んでいるまちを、友達、ほかの市の皆さんに自慢したいと思うのです。そのために、下松がもっともっと自慢できるいろいろなものを作ったり、あるいは、歴史やなども子供たちに説明して、山や川も自然もいっぱい、いいところがあると。一番私が強調したいのは、ものづくりのまちで、下松は大変いいまちなので、どんなものが、例えば、新幹線にしても、いろいろなものが世界あるいは全国に発信しているわけですね。そういった下松はすばらしいということをどんどんPRすべきと思います。

それから、今、一番話題になっているのは古墳ですね。古墳について大変いい話題ができたので、これをひとつ下松の目玉にしてはどうかと思います。これはコミスクの皆さんがいつもやっているのですが、CSのグループが下松を歩こうという企画を毎年やっていました、それで、子供たちを集めて、一緒に10キロぐらい下松の市内を歩いているのです。これは大変いいことで、今回は11月4日に下松古墳巡り、古墳を、天王森とか花岡古墳とか、いろいろな古墳を見て回っています。こういったことで、今、私は、旬なのは、古墳が一番PRするのに子供たちにもいいと思いますし、また、一般市民もまだまだ、古墳は出たけれども、どこにあるのか、どういった価値があるのか知らない方が多いので、どんどん古墳、郷土のことをもっともっと、一目で見て分かるような古墳の歴史館といいますか、郷土館といいますか、そういった建物が一つできるといいなと思います。「島の学び舎」という、笠戸島に一ついい郷土館というか、資料館がありますけれども、ちょっと行くのが遠くて、また、一般市民からもどこにあるのか、行ってみても、たいしたことがないなという方が多いです。だから、やはり今いろいろな意味で、下松の進んでいるところ、魅力のあるところを説明するのは、そういった郷土館的な、古墳歴史館的な、要するに、下松を自慢できるようなPRの館といいますか、そういったものが、できれば下松市の真ん中、市内でできたほうがいいのではないかと。特にこれからいろいろな意味でもっともっと下松は伸びると思うので、ものづくりで貢献しているというのをPRする。それから、古い歴史がある。それで、食べ物がおいしい。山もある。自然もある。こういったことをどんどんPRして、そういったことを子供たちに教える。それから、もう一つは、親がもっともっと子供と接する時間をつくってほしいですね。今、塾とかいろいろなところで、あまり親と話す機会がない。やはり一番大事なのは、お父さんもお母さんも子供たちと一緒に話して、遊んで、いろいろなことで接する機会を多くするべきだと思います。そういったことをさらに含めて地域連携で、例えば、祭りなども結構だと思います。子供がいろいろな企画に参画し出すようになったと。これは最もいいことなので、私たちの校区、東陽小学校でも、この前、東陽まつりという祭りをやったのですが、子供たちから、東陽小学校の子供から祭りに参加したいと。どういっ

たことで参加したいのかと聞いたら、テントを一つ作ってくれと言われました。何をするのだと聞いたら、テントで商売ではなく、何か皆さんと一緒にお話をしたいと。それで、何を売ると聞いたら、お金は要りませんと。ただでいいですと。子供たちは射的と言われた。これがまず一つやりたいと。もう一つは、肩たたきをしたいと。え、肩たたきしてどうするのと聞いたら、おじいちゃん、おばあちゃんもここに座ってもらってお話をしたいと。お話をするだけでいいですと。僕も実際にやってもらいました。5分から7分ぐらいでしたが、いろいろな子供たちと話をしました。何で祭りに参画したかったのかと聞いたら、やはり僕たちもこういったお祭りのお手伝いをしたいと。それから、いろいろな皆さんとお友達になりたいと。そして、昔の人の話を聞きたいと。こういったことを言ってくれました。だから、まさしく地域教育というのは、そういった他人がほかの子に教えるような教育、こういったものだと思うのです。だから、学校の教育がまず1番。2番目は地域。3番目は親。こういったことで、いろいろな教える皆さんがいるわけですから、これをもっともっと力を入れて、みんなで協力してやろうというのは、連携教育というか、そういったものだと思うので、ちょっと具体的なものはあまり言えませんが、下松をPRするとともに、子供たちをこれからもっと伸ばすためにも、どんどん教えてやると。教育以外の自然のよさとか、ものづくりのまちとか、いろいろな魅力を子供たちに教えていく。そうすれば、下松市は人口も増えるのではないかと、残っていくのではないかと、そういった感じがいたします。

○市長 ありがとうございます。木佐谷委員。

○委員 失礼します。私がコミュニティ・スクール委員をさせていただいたのが六、七年前でした。そのときには本当に、さっき林先生言っておられたように、大人だけが少し集まって、高校生も少しよく分からないまま話をして、どうやったら子供たちの中に地域の方が入っていけるかというところを話し合っ、やったことと言えば、公民館のほうにちょっと関わっていたので、公民館のほうからクラブ活動のグラウンドゴルフを教えに行くこと、その程度でした。あとは、お祭りにボランティアを募集するというぐらいのことだったのですが、今、このプレゼンを拝見させていただいて、本当にここ数年で子供たちをしっかりと巻き込んで、とても発展した内容になって、充実した感じになって、すごくいいなと思いました。すごく頑張って続けてこられた成果が少しずつという感じがなと思って、拝見していました。

楽しかったのが、子供たちの未来のアイデアや、小学生のプレゼンテーションとかの内容がすごく、やっぱり自由な発想で、予算とか何も考えずに、枠にとらわれない自由なアイデアがとてもすてきだなと思いました。やっぱり子供たち、今の子供たちの考えと昔の子供たち、私たちとか諸先輩方のような年代の方が子供だったときの考えって、明らかに違うというの、ちょっと子供たちと関わっていて思います。なので、やっぱり今の子供たちがどういうことを考えているか、どういうふうなまちがすてきだと思っているかとか、そういうのもしっかりと酌み取って、酌み取りながら地域の方と一緒に進めていけることが理想的かなと思っています。

このカリキュラムが、すばらしいものがつくられているのですけれど、これで9年間頑張ってきた子供たちが高校生になったときに、どれぐらいの「くだまつ愛」が育っているのかというところがちょっと知りたいかなと、プラスで思いました。中学生はこれぐらい、小学生はこれぐらいというふうなを出してくださっていて、さらに高校生になったらどれぐらいになっているのだろうと。下松にもっと住みたいなと思っている子はどれぐらいだろうな。あと、地域行事にもっと関わっていきたいとか、地域の方にもっと関わりを持っていきたいと思ってきている高校生ってどれぐらいなのだろうというのをちょっと考えました。そういったところにも今から発展していけるといいのかなと思っています。

あと、今後の課題のところにも書いてあるのですけれど、さっき江口委員がおっしゃった、お祭りに地域の子供たちが参加してくださってというのを聞いて、本当にすごく地域の子供たちがいると、やっぱり祭りに関わっていらっしゃる諸先輩方、ベテランの方々、すごく笑顔になりますね。元気ももらえますね。ただ、その準備の段階とか、お片づけの段階とかで見て思っていたのは、20代、30代、40代ぐらいの方が本当に少ないというのを、すごく実感していて、子供たちも一生懸命机を運んだりして、手伝ってくれるのですけれど、その中に本当に数名男性の若い方がいらっしゃるぐらいで、あとは、やっぱり地域のご年配の方がすごく頑張って祭りをつくって盛り上げていっているという感じなので、そこがちょっともったいないというか、親御さんも一緒に巻き込んでやっていけるようになると、もうちょっと子供たちの地域愛も育っていきやすいのかなという感覚は受けました。イベントごとを何かするときに、できれば親子で参加できるものとか、親子で、それこそ親子の時間を増やすと言ってくださいましたけれど、親子の時間を増やすための何かイベントごとが計画していけるといいのかなというふうにちょっと思いました。

以上です。

○市長 ありがとうございます。藤田課長の説明にどういう感想をお持ちでしょうかとお尋ねしたところ、埴輪の博物館をという、将来にむけた大変熱のある思い入れをいただきましてありがとうございます。

先ほど説明がありまして、平成26年に下松ではスタートしたという、県内では平成28年からですか。先ほどもちょっとチラッと出てまいりましたがけれども、私も豊井小学校の田んぼ、田植えに最初から関わっておりまして、林委員が先ほど平成24年頃にもうコミュニティ・スクールのはしりはあったよと。私も、あれ何年だったか、ちょうど私は県のほうに行っておりましたので、コミュニティ・スクールという話が出たら、下松の豊井小学校のあの田んぼみたいなのですかちいうようなことを言った覚えがありまして、そういう意味では、子供たちにふるさとくだまつを愛する思いを持たせるのは、やっぱり学校であり、地域の人だということで、このコミュニティ・スクールの重要性というのは、今、皆様方から非常に熱のあるご意見を頂き、本当に大事な、そしてまた下松は進んでいるなというふうな感じを受けました。下松は進んでいるよと、教育長が言われましたけれど、こういう地域連携教育というのは、人づくり、まちづくりなのだと。そこにやっぱり、ただつながってい

るだけじゃ駄目。学びがないといけないという、そこに「くだまつ愛」、下松を愛する、ふるさとに誇りを持つというのをどう育ませていくか考えております。

今、下松市は、人口減少社会になっています。ここ、二年、三年ですね。これを、現在の下松市において一番大きな課題である人口減少を市が取り組んでいるわけですが、教育の場、学校や地域で今後どのような取組によって人口減少対策に組み込まれるか、という話なのですが、今、皆さん方から、先ほど説明の中にもありました。やはりここは、下松を愛する気持ちというか、『くだまつ愛』を育む、下松に誇りを持ってもらう。小学生の頃からという、そういう思いを何か子供たちに持ってもらう、それが今、問われているという、この人口減少という、今、大きな波を受けている下松にとって、この地域連携教育の発展でどう課題に取り組めるか、先ほどもう意見を言ってもらったような気がするのですけれども、改めて、この辺をお聞きします。教育長。

○教育長 地域連携教育と人口減少の絡みでというわけですが、教育の分野から人口減少にどう抗っていくかというか、どうすればいいかということを考えたときに、内容もですけど、市の施策とも関わっていきますが、やはり子供を産み育てるような環境を、若い世代がこの下松で子供を産んで、そして、安心して子育てができるような環境を総合的につくっていくということが、まず絶対条件だろうというふうに思います。その中で、学校・地域連携の中で何ができるかということでございますが、やっぱり学校課題ですね。安心して教育を受けさせられる、受けられるような環境をつくるということで、今、大きな問題として、いじめとか不登校があります。あるいは学力の問題もあります。こういったところを解決して、安心して学校に通わせられるような教育環境を整えていくと。それを地域とともにつくっていくということが一つ大事なのだろうというふうに思います。

あわせて、子供たちの下松に対する気持ちを高めていくということが、教育の分野でしっかりできると思います。先ほど江口委員さんが言われましたけれど、やっぱり子供たちが誇りに思えるようなまちというものをしっかりアピールしていく必要があると思いますし、そうしたことが学習できる機会を、この地域連携教育の中で取り入れていくということが大事なのかなというふうに思います。私も先日、下松小学校で6年生と話をする機会があったのですが、子供たちは意外なことに、下松のことを知っているようで、本当に知らないなというのを改めてそのときに思いました。埴輪が出たということは、まあまあ子供たちは知っていました。ただ、どこから出たのかということについては、自分たちの校区に、天王森がありながら下松小学校の子供たちはあまり知らなかったという現状もありました。ですから、あと、下松は観光とか弱いのではないかなというふうに思っている子供たちが非常に多いです。確かに事実のともありますけれど、笠戸の夕日の話とか、笠戸大橋の話とか、あるいは米川とか、米泉湖とか、食もいろいろあるよという話をしたときに、ああ、下松ってやっぱりすごいね、となる。水道料金も安いし、住みよさは全国で31位。子供たちは知っているようで知らない。だから、先ほど江口委員さんも言われましたけれど、やっぱりいろいろな人が子供たちと話す機会があるといいかなというふうに思っています。そういう

意味で、市長さんがよく学校を回られて、子供たちといろいろなトークセッションされる、あるいは、市のほうでいろいろな部局のほうが出前授業をやっておられます。こういったことは、子供たちのふるさとを理解するという意味で、非常に大事なのかなと思います。手話の話とか、福祉の話とか、あるいは環境についてとか、あるいは、防災の話、農林水産、あるいは税とか、人権に関すること、それぞれ部局のほうで出前をしていただいていますので、非常にすばらしい取組なので、ぜひこういったことをしっかり学校のほうにも周知して、子供たちに下松のよさをもっともっと知ってもらって、そういうことが下松に残ろうか、下松でずっと住み続けたいなという思いを育むことにもつながるのだらうと思います。

それから大きな財政出動も伴うのですけれど、先ほど江口委員さんが言われた学びの館、歴史の館といいますか、ものづくり、そして埴輪、古墳、こういったものを1か所で学べるような建屋、あるいは、総合的な施設というものが下松市にあると、子供たちも学べるし、親も学べる。地域の人、あるいは、全国からすばらしい埴輪あるいは古墳を求めてやってこられるということも考えられます。それは、ひいては、子供たちに誇りを養うことにもなると思うので、長い目でそういったことも教育委員会として、主管部局ですので、考えていかなければいけないというふうには思っております。

以上です。

○市長 ありがとうございます。

○委員 いいですか。

○市長 どうぞ。江口委員、お願いします。

○委員 人口減少を止めるにはいろいろな方法あると思うのですけれども、まず、私は、工場誘致といいますかね。広い土地が下松はあるのですから、水もある、海もある、全国からいろいろな工場立地への条件が一番いいので、まず工場を誘致することとか、あるいは、都会とか、いろいろな土地から来た人には、下松に住んだ場合は少し税金を安くするなり、あるいは、現在住んでいる下松の若者には、出産とか結婚とか、いろいろな意味で税金対策をするなり、あるいは、下松に住む人には家賃の補助をすること、あるいは、下松の中の空いている家ですね。旗岡にしても結構空き家が出てきました。そういったところに若者が住めるような環境にして、少し家賃補助して入れてやるとか、あるいは、若者は今、生活が苦しいですから、プレミアムチケットを今、全市民に配っていますが、あれを限定して、何歳から何歳の若者だけにやるとか、若者を優遇するような若者対策。そして、あそこ下松は若者に優しいぞ。若者が来る。若者が来れば、当然子供も生まれますから、人口が増えていくと。小学校もいいのではないかとということで、特に若い人、お年寄りもちろん大事ですが、お年寄りとは、今度は若者をターゲットに少し補助をしてあげて、若者が住めるまちが僕は魅力的なまちになるのではないかと思います。

○市長 ありがとうございます。よろしいですか。林委員。

○委員 私、ここ以外に、実は、この学校教育課の事業なのですが、心豊かな子どもを育てる推進事業というのに関わっているのですが、そこでやっているのは、一番大きなのは、挨拶

運動、それからボランティア関係、そういったことをやっているのですが、この会議には、いじめ問題に関わる会議でもありますので、警察署の課長さんとか、それから、徳山児童相談所の課長さんとかが来られます。その方たちが、あるいは、いろいろな地域の方もこれに参加されているのですが、この人たちが言われるのは、とにかく下松の子供たちというのは物すごく素直で、きちんと挨拶もできてということを言われます。それだけ、ある意味、私は教育がうまくできているからではないかなと思います。挨拶運動だけ取り上げても、これ、実は平成20年からスタートしている事業なのですが、各学校にのぼり旗を立てて、それぞれの学校でつくった挨拶の標語を基に並べたりして、そういうことが非常にできているすばらしい、そういう意味では、まちであるし、教育もできていると思います。だから、そういうことを、どういうふうにアピールするかと。これはちょっとなかなか難しいですね。ただ、子供たちが、あるいは、保護者が安心して、先ほど教育長も言われましたけれど、安心して送り出せる学校であるということは間違いないと思いますので、その辺のPR、それから、今回ちょっと流れたようなのですが、2日に大雨のために中止になりました市制記念式典の後にある予定だったまちづくり意見交換会で、このときに、たくさんいいプレゼンの資料とか、それから、末武中学校「未来の下松市マップ」というようなことも作っただけなのですが、そういうものもできればどこかで披露してあげるといいかなと思っています。人口減少にストップかけるということは、ちょっと私の中ではなかなか思いつかないのですが、少なくとも現状で言えば、下松市は子供たちのために、いい教育はしているという自負はあります。

以上です。

○市長 ありがとうございます。木佐谷委員。

○委員 私自身、宇部市の出身で、ふるさとに帰っていない身なので、ちょっとどうかと内心思っているのですが、逆に、一度、市外に出たからこそ、ふるさとの魅力って結構分かるというか、あそこがよかったなというのが、別のところに住んでみて、ああいうところがよかったなと思い出すことはしばしばあるのですよね。そのときに、やっぱり戻ってきたいと本当に思えるかというところが勝負かなと思っています。一度やっぱり高校行かれて、その後、就職とか、大学行くとかで県外・市外に出られた方たちが戻ってきたいと思える部分がどれくらいあるかというところかなというのは私の中で感じていて、そのためにもやっぱりこのプレゼンの終盤にあった「今の地域に住んでいてよかったと思うことを選んでください」というところで、近所の人、町の人がいいというのは、すごく大きなところだと思うのですね。お祭りだったりもよその市でもありますし、ほかのことはよそのほうがいいのかもという所もあったりはするのですが、やっぱり人がよかったなというのは、ほかに変えられない部分かなというのがあって、そこを考えたときに、この地域連携教育の取組を本当に地道に続けていって、地域の方が子供に優しく、子供も地域の方に頼って優しく親切にし合えるという社会が一番理想ですが、その関わりを見出す部分がやっぱり難しいというか、しっかり融合していける部分が少ないような気はしています。なので、その辺が昭和の初期では

ないですけど、昔みたいに近所の方と本当にたくさん挨拶をし合える、日常の会話をし合える、今日どうだったと聞けるような関係づくりができるようにするためにも、その地域の行事で交流し続ける、交流をしていける環境を生み出していくということで、大人になったときに市外に出たけれど、やっぱりまちで暮らしたいなと思えるところに行き着けるような気がしています。今、ふるさとを離れている私からすると、そのようなイメージです。漠然とした話ですみません。

○市長 ありがとうございます。木佐谷委員の話にもありましたが、子供の意識の中でも、近所の人、まちの人が優しいとか、学校に行くのが楽しいとか、先ほど林委員も言われましたけれども、挨拶ができ、素直であり、ここでは、安心して学校へ送り出せる、教育的な見地からも非常にいい教育。そうして見ると、これはやっぱり、さっき教育長が言われた、もう何を言っても知らない人が多い。もう本当この埴輪の古墳、埴輪、下松の歴史文化、こういうのを子供たちが少しずつ知っているけれども、親は知らないという。だから、これは先ほど江口委員も言われましたけれども、ものづくり、歴史の森をとというような話も、博物館ではないですけどもね。これやっぱり教育会議というよりも、市の執行部にもっともっと市のPRを強くして、皆さん方の先ほどからの意見を聞いたら、もう少し市のPRをして、子供たちに物事を知ってもらって、くだまるのマスコットキャラクターを作ったときも、子供を中心に選びました。総合計画子ども版も、これは画期的な話で、そういう苦労はしておられるけれども、それを継続的に生かして行って、どんどん宣伝をするというのは必要かと思います。くだまるを下松のPR部長で選んだのに、この間の何かの大会があったら、くだまるもいないという。だから、せっかく作ったのだから、このまま総合計画の子ども版であり、くだまるであり、どんどん生かして大いにPRするのが大切ですね。さっきから教育現場はもう本当に、内外から非常にいい評価をいただいているような気がするのですね。学校へ行くのが楽しいなんて、うれしい話ではないですか。やはりこれは、もう教育の現場と同時に一緒になって総合的にやっていく必要性を、今、痛感しているところであります。

そういう中で、ふるさとくだまつを愛する子どもを育てる、ふるさとの下松に誇りを持たせる教育だという今日の連携教育の地域と学校との連携教育の中で、下松に誇りを持って、ふるさとくだまつを愛する子どもをつくるということで、その中で、これもうれしい統計結果が出ておりますが、将来もう65%の児童が大人になっても住み続けたいという数字が出ているのですね。こういう結果もある中で、住み続けたいと思う子供が増えるために、「くだまつ愛」を育てていくために、今、教育の場ではこれだけ頑張っているよ、いい傾向にあるよという先ほどからの話なのですけれども、もっともっとこれを、65%をもっと85%、90%の子供たちがという、そういう思いも含めて、希望も含めて、こういうことを考えたらどうか、こういうことをやってみたらどうか、こういうことを教育の現場で指導してみたらどうかと、そういう夢のような話でもいいですから、ちょっとご意見をお聞かせいただけたらと思います。教育長、お願いします。

○教育長 将来も下松に住み続けたい子供たちを育てるためにということで、決め手はなか

なか難しいのですが、やはり今やっていることを地道に継続していくということが大事なかなというふうに思います。教職員の働き方改革ということもいろいろ言われていますが、そういったことへも配慮しながら、無理なく楽しみながら、教員も子供たちも、それで、地域の方も共に学ぶことができる取組を持続可能なものにしていくということが大事なかなというふうに思っています。先ほど申し上げましたけれど、子供たちは下松のよさとか魅力とか課題とかを知らないからこそ、愛着とか誇りとかを十分に感じていないところもあるのではないかなというふうに思いますので、できるだけ多くそういう学習の場を増やしていく、下松を知る機会を増やす、そして、下松の温かい人とのつながりの機会を増やすというようなことが、学習の中で大事なかなというふうに思います。子供たちは多くのことを知りがっています。特に下松のことについては、目を輝かせて学んでくれておりますので、子供たちが下松のよさを実感していけるような学習機会をぜひつくっていききたいと思えますし、そういうことがシビックプライド、醸成につながっていく、やがては、先々住んでいこう、住み続けたい、あるいは、一回外に出ても、また下松に戻ってみたいなと思えるような子供たち、大人が増えていくのではないかなというふうに思っております。

以上です。

○市長 ありがとうございます。

○委員 いいですか。

○市長 江口委員。

○委員 市長御存じと思いますが、子ども食堂というのがあります。今、全国的に多くなっているのですが、下松も二十の手前ぐらいまであります。その中で、旗岡のほうで子ども食堂が生まれて、3世代交流というのをやっておりますね。それで、子供たちだけでなく、今はお年寄りもたくさん来られて、ご飯を食べながらいろいろな話をする。中には、子供たちが会館で勉強までして帰ると。そういったところもあるし、花岡には、お母さんたちが四、五人集まって、それで、自分たちの城、コティというグループなのですが、城をつくって、そこに子供たちを集めて、そして、不登校の子供たちも来て一緒にお話をする。それで、僕は、教育者というのは男もいいのですが、特にお母さん方のほうが子供にとって非常にいい先生になるみたいなのですね。ご飯を食べながら一緒に何でもない普段の日常の話だけで子供たちは心が休まるそうなのですね。そういった機会をどんどん与える、あるいは、そういった人をどんどんつくる、そういった場所をつくる、そういった応援をしてほしいです。小さなことなのですが。子ども食堂という名前でもなくても結構なのですが、子供たちが集まって大人たちと遊べるような、遊びですよ。遊びとは、話ができるような、誰にでも相談できるような。昔はお寺などでやっていましたが、今はそういったところがあるので、そういったところを活用するなど、あるいは、市が独自に放課後、子供たちに集めてやっているところもありますけれども、そういったものとは別に、例えば、PTAのお母さん方、婦人会の皆さん方、女性のパワーはすごく強いので、そういった皆さんの力を得て、子供たちをうまく育ててほしいなという気がします。

○市長 ありがとうございます。意見も、最初の段階から熱い意見をいただきました。

ありがとうございます。特にものづくりだとか、古墳・埴輪、こういう旬なものを子供たちという意見もありましたし、とにかく若いうちに下松に誇りを持ってもらう、そして、下松に愛着を持ってもらう、下松すばらしいよという意識を持ってもらうには、やはりPR。子供たちに教えない限り、やっぱりそういう意識は生まれないので、先ほどこういう話がありましたが、知らない、知っていないということが何度か出てきましたので、そういう意味では、教育長が、教育を充実させると地域のことを教える教育も、そしてまた、江口委員からもありましたが、子供をその地域で、食堂という一つの例が挙げられましたけれども、いろいろな形で子供たちを育ませる、地域と教育の場で一緒になって一体的に。そういう意味では、教育の場と市長部局が一体になってやらないといけません。やはり埴輪など、かなり歴史的に重要な立場の人がこちらにいたという1500年前のロマンなのですけども、こういうのをどんどんPRして、子供らに訴えて、下松はすごいところだということを伝えていきたいと思います。私も車両運搬、イギリス向けと台湾向けで3度やりましたけれども、この発想の原点というのは、とにかくこんなものが下松にある、これを幼稚園児、小学生に全員見てもらおうというような、下松に誇りを持ってもらおうというのが原点でスタートしましたので、今現在も同じような思いで、「子どもを大事にするまち下松」というのを表明しております。そういう意味では、教育現場と市長部局とが一体になって、愛着を持てる、誇りを持てるような下松、住みよいまち、住んでよかった下松というものにしていきたいというふうに考えておりますので、よろしくお願いします。今日は、本当に何かいろいろな熱い思いをいただきました。ありがとうございました。

では、事務局のほうにお返しします。

○教育総務課長 本日は大変ありがとうございました。貴重なご意見もいただき、お礼申し上げます。

それでは、以上をもちまして令和6年度下松市総合教育会議を終了いたします。お疲れさまでございました。

午後2時50分終了